

電子複写不可

沖繩戦記
(座間味村渡嘉敷村戦況報告書)

防衛研修所戦史部



慶良間島
座間味村及公渡嘉敷村戦況報告書

座間味戦記

梅沢少佐(隊長)の率いる約千五百名の日本陸軍部隊が
始め座間味村を座間味の本部を設置して離島の所
部島及慶留間島と各部を逐次駐屯したのが昭和十九年
九月十日であった。

戦況の進展に伴い今迄住民の胸中かすかどしかたなかつた最善
戦基地化が軍の道に駐屯依つて美証されて覺悟を新に
し其の勝利を確信し全住民挙つて軍に協力し又最後
まで行動を共にする事を誓ひ合つたのである。そして其の日
最早運糧人合は軍將兵の持物を受持青年團員
は荷降作業に必要な担棒を切出たし入りをなした。夜を
徹しての作業を敢行し曉鶏鳴を聞えどウ部落民の心は
非常な強固であった。

翌十一日予將兵の荷降作業が始り村内の若人達は一人
残らず軍に協力作業完遂と邁進した。

九月二十日まで漸く民衆は將兵の宿舎割当も完了した
を愈々將兵は陣地の構築、防空壕の構築及彈薬倉
庫の建設に着手し又住民は軍民用の食糧生産に懸命の
努力を払い以後この毎日の日課であったが住民は超重労働
による物かや必勝を信じきっている住民は苦痛を感じ
どころか却てほろほろとした感懐を感ぜようである。

十月十日今日は軍進駐後一ヶ月目の日である。何時もの様に
軍民作業に取り掛ったが十時頃より阿蘇島より飛
行機が低空に於銃の音が聞え出した。
民衆は敵機の来襲を思ひ避難を軍に申し出るも
軍の方では今日は日本軍の演習であらう心配は要しない

から軍心して作業を続行せよと却つて叱られたがそれより住民の
心は一向に落着かず常に不安な気持ちである。

午後一時頃沖繩本島から避難して来た船舶に攻撃を加えられ
て始り敵の襲撃を軍の方より認識すると共に警報が発せ
せられ軍民始りて敵の襲撃と騒ぎ出したが其の日は空襲に於
ける被害は港内碇泊の船舶のみに加えられ陸上には何の被
害もなかった。

翌日より相変らず軍民共防備の仕事に着手し十月十日以
来全く其の姿を見せなかった敵機が本月一月二五日午前八
時頃より突然空襲を現れ再び一回と全く同様に港内碇泊の船舶
に攻撃を加えられ五、六隻の船舶が炎上してまた、く阿蘇本
島に浸してしまった。

陸上には何の被害も無かった。

三月二十一日今日も一月二日と同様短時間の空襲があり
被害は船舶一隻重破されたのみであった。

当時軍は南島苦のため食糧と懸念して食糧増産を企
畫し男女青年団生と国民学校高等科生の協力を求め
米田地の開拓の目的を「マキシ」で行き作業開始約一時
間して突如頭上を小型機(アラマシ)四機が通り過ぎると
隣村の渡嘉敷島に爆弾を下して始めて敵襲を覚知した。
そして見上げると上空は無数の機影を光見した。おびたし
い其の数は青年団並に生徒達は只茫然と立ち呆すのみ
せ、あつて我々が初めて見れば座間味却落方面からは赤黒い
如何にも気味悪い煙が火まなかなりとなって大空高く舞昇つ
て行く途端に全身の力が抜けて頭がふらふらとなす。そのま
ま感じに有り教知すいた。あ、未年住み別れた村は

(十四)

我々は又家族はと其の事否を気遣うだけで其の場から動
く事すら出来なかつたと言ひ青年団及び生徒等の心情が
察せられて断腸の思いがするのであつた。生命の危険は暫
とは先頭考えられぬ。

其の内ト部落全体を破壊し尽したか見える敵機は今度
は周辺の山々ト攻撃を加へ始めた。最初ト「ガンリン」を撒き散
らして其の上ト焼夷弾と来たから堪らぬ。忽ちトして山全体
が火の海と化して仕舞つた事難々たる火の燃える音。爆発の
音が入り乱れて何とも形容する事が出来ず只我を亡れて
見入る許きあつた。愈々周囲の山々が火々と燃え盛る
頃になつて始めて身の危険を感じ慌て、深い谷間に難を避
けたが極度の絶望感と一人として口をさく者もいない。
深い物思ひと時の経つのも全く解らない。其の周囲を繰り

返した敵は一枚去り二枚去りついで三枚去りは全村引揚り
つれまじい。一刻も早く部が落の被害の状況を知り度く速
る心を押さへ谷間を飛び出し比皆帰途に着く。
作業隊は表旗を案じて途中坂道を駆け足で急ぎに敵
隊は又作業隊を案じて追之に来る。出会してお互に無事を
喜んだ。こらうは部が落の事を聞き、敵隊はこらうの事を聞き
お互に尋ね度き事をかまなくて一刻も早く村全体の状況が
知りたくて急坂を火急な峠迄来て見下せば之をた何とした事
も兼ねて覚悟はして居るとは言え今日目々のあり見る所の
我が村の有様は此が今朝まで各戸とも石垣で圍まひ懸
然としていた我が村の。山麓近頃の学校は屋根も軒
も皆前より落ちて炎々と燃えて居る。村中は殆どの石垣が
崩れ家は全壊炎上、大破、中破其の被害たるは全滅

(十三)

其の通りである。泣きも泣けぬこの惨状に皆が失神状態に
なり乍らも漸く各自の屋敷に帰った。住むに成なく全住民は
其の日から早速防空壕住いである。不幸にも当日住民二十
三人の死者をだし傷を受けた人の数も相当であった。幸いにして
農耕地域の被害は皆無は天祐か、壕生活に入っても食物は
大丈夫確保出来た。
三月二十四日の真も自早をつく壕で一晩を過して目を覚まし
頃には既に敵隊の来襲である。部が落の残った家々に對し又
各所と設けられた軍施設に對し物薄の攻撃を加えて居る。
飛行機の数も昨日より劣らない。
二休友軍隊は何をしてゐるのだらう。敵はこらうの無抵抗に對
して存分に悠々と親猫が小羊を弄ぶ様と何んの子羊もなく爆
弾投下、軽銃掃射と首をくさいはるほどである。

其の頃かういふとこそおぼしむ。誰かが今度の戦争は敗けるのではないかと思つていたのであろう。心待ちに待つた友軍は遂に姿を見せずおまけに一刻からは艦砲射撃まで加へて来たかうたまつた。あゝ日本もこれ程終るかもしむ。此の戦争で敗けたら何事もうわさし聞かされた。婦女子は其の身を汚し後に刺殺され男子は道に並べられローラーの下敷にされて仕舞うと云う通りとなるのではないかと夜も眠る所の騒ぎではない。あいを思ひこれを考へたらぬな事があつても勝抜いて貰わねば舌勝抜かねばならん。必ず勝つ様に協力し努力しようとは婦女子でも心に誓はずには居られないのであつたらう。

今日は昼夜を徹しての艦砲射撃の連続であつた。恐怖の一夜を明かした今日二十五日朝から艦砲と空からの攻撃に一刻も隙も出さず事が出ない。山と河と谷に砲弾爆弾

の炸裂する音は耳をつんざく程である。人の話では相当数の艦船が港内に来ると言ふ事と聞かされ何とも言へぬ悪感に背筋が冷くなった。一刻に至つて梅沢部隊隊長の命令に依りて住民は男女を問わず若き者は全員軍の戦士と参加して最後まで戦い、又老人、子供は全員村の志魂碑の前で松竹玉砕する様にとり事であつた。命令を受けた住民は拵つて指差の場所へ集つて来た皆盛装に着替えて居る。

其の時部隊長及び村長が現場に現われるのが一足早かつた。全住民は自滅を完全に遂行したかも知れない。幸か不幸か敵艦から発せられた一弾が志魂碑に命中したのを死は覚悟していたものの一人が逃げ始めたのを全員が四散して任まつた。壊れた帰る者、山と河と谷の思ひ々々の方向に走り去つてしまつたのである。そして若き者は殆んど軍の所に走り行動を共にした

三月二十六日朝敵弾の中をくつて小高い場所に登つて見渡したう更に失望落膽させられたのは今日のみならず繰りかへつた有様は島の周囲は全部敵艦艇で重二十重に取巻かれて居るではないか。其の敵のおびたしと言つたら四五哩も離れた各小島迄足もぬぐすに渡れる位だ。今日も物凄の敵の敵兵が上陸して来る様で生きている気持はせいじんない。午前十時頃より愈々敵方では上陸を開始した。其の後護攻表で陸上は正に彈丸の雨である。

部隊に於て之に応戦して日本軍も遂に抗する事が出来ず俗稱「高月山」迄後退の止むなきに至った。午後になると全軍者所山に集合、命令が発せられて最後の抗戦場所と定められた。そして各配置が決定されて上陸軍を此処で遮断すべく待ち受ける事になったが夜になつても敵は山に登る事

気配がない。

しかし部落内には既に敵兵が叢集しているが乍らの報告は夜に今夜中は絶対山頂まで来る事は出来ないと知つた友軍は三、三、五、五と木の下、草むら等に集つてお互に獅子の話を身の上話、早真の見合等明日なき命を忘れて皆最後

の決別をお互下まつている様は傍で見ても同じ運命におかれています。身下う己を忘れて涙がましく思われれた。

日が暮れて頭上には日七八日頃の間が雲り合同の頼むのやがせりして何んもなく寂寥の感を一層深くした。

其の頃部隊長の命により斬込隊が組織され愈々今更敢行する事になった。

其の命を受けた小隊つる子外四泊りやうな青年団員に對して出発の際に内藤中尉より雑言五個と手榴弾が渡されて

「今迄の斬込で生存者は」相崎山に集合するからお前達
は此の彈薬を指差の場所迄運ぶ様だよ」と言われ、時刻
同じくして五石は目的の地に向つた。運ぶに再会を望む
て石残りも惜しむつゝ別れていった。

却返と分れた五石は彈薬箱の重さと来たう普通の場合
を五分間待つて居る事すう出来な。他が「バンド」は肩
こい込む。道は山下の落葉に足をさうわれ、山を合け谷をよ
じ登り明方の四時頃遂に目的の地迄辿り着く事が出来たが
僅かながら一縛縛の望みを期待して居る將士の帰還は夢
にも見えないがった。

それでもまだ諦めるのは早いと夜明けまで待た事にしたが、待て
ぬも待てぬも道に迷を見せた者は一人もいない。最早全買玉
砕したものと諦め彼等五石を敵に辱かしのめを受け殺されるより

か自分自身で死んだ方がよいと協議一決した。辺りを見廻しても
人影一人もない。此の山中に生きた居るのは此の五石の外はない
と思つた。事更其の日は住民も各所に於て自決を固く推
と様々の慘事がくりひらけられ自決者七五石をおこなひである。
その惨境たる有様は奥に目を覆うものがあり、彼所三役の
自決も当日であつた。

一方住民の大半は島り西北端にある俗林「ヌシルガマー」の
自然環境をたよりと或は失心せんとする意識を取り戻して、
集うて行つた。

又一つの頼みとする。境は入口をアダン森に回復されて奥行きが
八十米程もあつて海山岸にあつたの満潮時とは到達する事
が出来ぬ境で敵艦がうはわすかたつた。森をくぐりこみ、い
程度のもんだが之が住民の頼みとする唯一の境下をた既に

ニトは三百有餘人の住民が至つていつりたさへいた。
オ一て物音一つたす不気味な空気が壕内を一つ、サ恐怖
とびの、く人々、綾目もわからぬいとし子の口口手拭を押さ
てる親、或は生米をかじつてゐる子供すべ、敵の察知を
恐れて物音一つたに立ちす、又時々ため息が聞えらるで
ある。オ一て此の壕とは水がなく比自着のみ着り、オ一で食糧の
持参もなく、昼は敵の看視がまじしく、オ一で暗夜、干潮
時に辛うじて壕をこみ出して、木を木の食糧を探す程度り
ものであつた。中には小便を音か子にす、うて渴きをしうと
者も居た。

しめ殺すとの事までも互に決められていた。然し戦争は益々
激烈になり食糧は食いつぶし今は又死以外に望ぶ方途は
無くなつた。其の乏窮状を見兼ねて一住民大城松三氏は
自ら申し出て三百人の食糧を補給するとの散弾をくつて
壕を脱出した。住民は唯彼の帰るのを今か々と待ちあが
つ、二、三日を経過した。其の間全部は殆ど飢餓状態と
なつて口にするものは何一つとしてなく、脱去後四日目に彼は
やつと帰つて来たが食糧はといえは芋一つさえ持参せず、
て散弾のたつた重傷を受けてオ一を引取つたので
ある。其の時かう壕内では食糧もなく、乳呑み子を持つ母
親は乳がまらず、子供は大苦しみ、泣き止みぬ、泣けば皆で死
なせと言ふ。親子の愛情も一時にして消えつてもう有様
を壕内では漸く騒動し始めた。オ一して脱去する者も居り、

他は米軍突調を気力を失つた者ばかりであつた。
敵は陸軍時上大和馬の塚に居た仲村渠一表外三三の夜
族は米軍の上陸を知つて自決を計り叔父仲村渠真行
が反軍の軍力を借りて来て家族全員を刺殺した悲慘事
あつた。

又「内川山」の塚には米軍の道長が依つて、あつて小太の住
民に討つた村長野村正次郎、收入役宮平正次郎の両氏は
尊の尉に撫激効に当り、助役宮里盛秀氏(兵部主任
兼分會長)は軍から渡された旧式三八式銃とて米軍の一人を
射殺して自決したのである。一方米軍は益々山頂迄(道長
たの住民は今も施すべし術もなく遂と意を決して全員
五十七名天皇陛下万才を三唱して各自持参せる毒薬
(アヒサシ)小刀、カミソリの刃、手榴弾で千石一時頂自決を

決行したのである。

其の他住民百五十五名程も自決した。これは敵は陸軍道長の
際は男男女女を問わず生かすつもりは深くと自決せよとの隊長
命令に従順に従つたのである。

他方慶直岡島防衛と当る(天下隊)的一ヶ中隊の海上特幹
隊の一隻は米軍の急進裏に依つて不意をつかれて一隻も道
裏に来ずと敵軍を目前とせし上陸を中止したのである。そして
邦人落民と共に部落後方の山頂に陣取つて最後の交戦を
決行した。其の時部落落民は皇ふと殉すまの覚悟を以て自
決を決行せる者四十五名、戦死者六名を出した。

又阿蘇島には古賀少佐の率いる九〇名の設置隊と野田少
佐の率いる特幹隊四〇〇名が駐屯して、だが戦況の悪化に伴い三月
八日付沖濃聯隊正司令官の命令に依つて千八百八十名を以て田力

子と屋敷比久嶋島、内釜山の釜火と阿加不氏子校高等
科生及び青年義勇軍四〇名計一三〇名は阿加島防衛隊
として野田部隊に編入せられた。三箇所の猛襲を實施された。
三月二十日敵艦の来龍を依つて昼六時の別なく連銃爆轟を
受けて山林部落各所に発火軍民協力消火に尽力した。
明けつて二十日は軍食糧倉庫に発火軍は抗戦して之が
消火及食糧品確保に努力し又住民は一切の松情を捨て、
軍に協力した。

二十一日午前五時食糧確保作業中阿加島最高峰の蔵原山
に敵がラン材を襲撃猛烈な爆轟が展開された。
敵は於て最高峰部隊は上陸の赤氷ありと発表し軍は各
方面要所に監視兵を配置し敵の上陸に対処した。敵艦の
空襲尚熾烈にして軍民の活動殆んど不可なり状態に陥り

漸く午前五時非常食の配給あり。

午前五時四十分部落西方(比津志方面)の監視哨より敵
艦発見の報あり。続いて同哨より機動部隊ならんことを知り向
なく上陸準備の企図を有する旨報告せらる。

野田隊長は全員山頂に後退すべしと命を下す。午後一時
敵は爆轟と艦砲を以つて猛烈な攻撃を加へ来る。彼我攻防
戦愈々熾烈となり敵は部落前方海岸に上陸。激戦は愈
々極度に達した。友軍は其の対策を講じて無謀艦を山頂各

所に設置して沖浪木島より連絡を密にする。敵の電波探知機
によつて無謀艦の位置が発見され敵の艦砲爆轟が無謀艦の
位置に集中し遂に阿加島を砕き決意して緊急陣の打電

を最後に無謀艦を自隊より破壊し連絡不可能となる。
一〇時特幹隊は二十四日小隊生を含む新隊が編成され

出動準備完了し隊長訓令の後最後の執杯をなす。

二十四日二十三時我が防衛隊は慶留間海峡に航行破船する大小の艦船約数百隻の中を(某大佐)を連絡の舟の浸る敵に刺舟二隻より護送する(余)中敵猛火を浴びるも無事目的を達成し帰島した。

二十五日午前編成された各斬込隊は防衛隊の道案内となり又特幹隊は目的の海岸に。整備中隊は阿蘇部落と並行する各所の敵斬込を敢行した。斬込隊は運よく敵陣中へ(道案内)不意をうけた敵は約四時間ほど直り激戦が展開されこの激戦に果して特幹隊の一中隊二中队は舟艇を来込しその激戦の好機を把握すべく努力したるも恰も月夜に高度の照り輝き其の上熾烈なる敵艦砲及び空爆によって容易に其の柱を掴む得ず其のまゝ待機の状態を特幹隊

の三中隊は慶留間島阿蘇表に渡泳して各舟艇に乗り込み敵艦戦向けに表を敢行した。

又整備中隊は却る方面の斬込に成功し敵は多大の物的・人的精神的損害を加え一更に海岸線に次回作戦を企図して行動開始中惜しくも敵の敷設せる地雷に依つて殆んど全滅の悲哀を満喫した。尚ほ残存せる数名の兵士は目撃の敵に殴り込みを敢行戦死した。

特幹隊の斬込隊も各半数位帰隊せるも其の戦果は予想外であつたを日報告があつた。

二十五日二十三時生存せる兵士はもう一回目の斬込隊を編成して海岸線附近に抵抗線と張り敵を再び斬込し敢行猛烈な激戦を展開し敵は漸次敗退抗戦不能の状態となり艦船に退却せしめ尽大なる戦果を挙げた。

明け二十一日午前十時残存せる兵士中約五十名を以て
小部隊を編成して嶽原山に於いて更に抗戦準備中不意に
上陸せる黒人軍二百名からなる敵と交戦し白兵戦を演じての
激戦一時同後棄退せむも其の間我軍の損害多大にして戦
死者多数を以てした。

一般住民は却て落最高の大嶽の松山や谷間に避難した米軍
上陸以来我が戦況が日に悪化し玉砕の最後が予期せられ
た予軍は支給された非常用手榴弾に依つて悲壮なる自
決が決意され一隊若しくは親族一固りとなり涙の中に今後
の行動を語り合ひ或は自決の方策が論議され殆んどが自
決が決定せし日涙の中に死が決行されていた。

ところが手榴弾一個では一隊一隊全員の自決は望むべくもなく
否却つて死どころか傷つて舌しむ有様であった。更に降り

銃と雨天の為不発弾が多く住民の唯一の望みをかなえて
くれなかつた。時と再び軍への協力が高度に要求されたので
無法な自決を辭け死力を尽して軍に協力した。即ち軍と同
生共死其の行動を一トし男女老幼を問わず「一人一殺」の言
葉を厳守して戦闘に参加した米軍上陸の日神風特攻隊
の悲壮な活躍ぶりを見た。即ち台湾より飛行せる神風特
攻隊は慶良間海峡又は阿蘇島周囲を取巻く敵艦船に
討つて八時頃より晩にかけて毎日、如く花々しい戦果を挙
げ、一掃を以て、最少三隻以上を撃沈した。これは爆弾
投下よりも最後は体当たりによる敢行された。
我々はこの状況を眼からせる時神風特攻隊の精神の尊さ
これに続くべき魂が心底から全身にあられる位だった。
特攻隊乗襲の敵は空襲警報を登し慶良間海峡一面に

艦隊を強さす。主戦を好むとして華氏は高所より神風特攻の
成功を祈り作つた戦果の見事さと我を忘れる事が多く、為に
敵弾に当つて多数の負傷者を出した位であつた。社中隊が
海岸に漂流せる有賀航空上等兵曹(戦死)の抗戦の見事
ぶりは全員涙をのんだ。

これは敵艦三隻を撃沈しに後戦死しをある。

戦艦は四月二十九日天長節を期して神風特攻と共に最後の
斬込めを行動せる日。生憎神風特攻隊未撃せず期待なく
戦ひ作戦を控へ有様であつた。

次後戦の戦艦は食糧漸次窮乏の状態となり民に討つて「草や
野菜」つたりとも一切軍の許すを及ぼすして採取するものは銃
殺するの命を覚し谷肉の木を自由と飲りす次果に果
養不良となり年暮り子供が次々と倒れる教が増して来た。

其の上生存防衛隊として民間避難場所内に於いて犠牲
者も甚るる作業迄実施された。

兵士の糧食も米の米粒などを発見されると十日間の絶食又
は銃殺という厳命だった。兵士の一日一食中一杯のヤマブキ
を食つて生を継いだ。

そして違反者三十名が銃殺された。

右の様な食糧事情による軍の嚴四訓策は極度に達し兵士の苦
しみはさうおつて一般住民の苦しみは言語に絶する程であつた。

水と自由と飲めず軍への協力によつて疲労し切つた体を養
う術もつた人々、苦勞と栄養食による衰弱と死んで行く
者は日増し多く実に悲惨であつた。だが住民はこれが滅松奉
公であると思ひ、見る目も痛ましい光景の中、骨と皮ばかり

とて、苦しむ事になった。

終に米軍は難攻不落の浮島を降伏せざるに色々の手
段を用いられ、宣伝機等強力に実施したるも我が軍民はそ
れに迷うことなく自我に鞭打ちつゝ軍民一体食糧の解決増
産に努力した。

六月十五日海岸方面に於ける水沼軍曹の率いる作業人の
敵軍伝書に包圍され、該軍曹は米軍に捕えられたが間もなく
降参せられた。六月二十五日迄に降伏する者も少く敵の要求を
野田隊長は運路した。然し野田隊長は六月二十五日午時
一時全員集合を命じ最後の訓辭を行った。即ち「降伏
するは訓辭であった。

六月二十六日大本營発表に「日本天皇は無条件降伏せしむと
あるが故に我々は彈丸一発も打たないから早く山から降りて来
いとの宣伝と敵グラマン機による宣伝が激しかった。

我が軍はそれを信用せず八月二十日敵將校三名が水泳
着のまゝ我が本部に上陸。終戦の情報を発表したが野田
部隊長は之を信せず断乎として降伏せざる旨厳達す。
更に米軍將校は野田部隊長に渡而島に生存する日本
軍は無線機を所持する故明日同島に渡りその真実を確
のまゝの話し合ひになり翌日三ノ中尉、水沼軍曹をして米
艦より渡而島に渡り生存日本軍を以て終戦の真実を確保
した。依りて八月二十五日遂に渡を以て降伏した。

渡嘉敷島における戦争の様相

この記録は米軍と陸軍赤松隊降伏までの沖渡戦の一端渡嘉敷島の一部を記録しましたが本島と切高された孤島の戦線は幾多様相を異にするものが多々あった。

当時村長古波藏惟好氏役所吏員防衛隊長屋比又五祥(現生存者)等の記憶を辿って其の概略を纏めたものがあります(過)去を省みて如何に戦争が罪悪であるかを言々は実際に体験しそして今後幾多反省すべきことがあるかを痛感した。將來に再度この様な事を繰返すことのないよう永遠に平和を愛好し人類の幸福と繁栄を自由の中樹立して行くよう願って止まない。

昭和十九年九月二日七午七時の汽船が慶良間海峡阿佐港外に停泊してゐた。その船を目標に友軍戦斗機が三機編

隊を毎日急降下演習が続けられつゝ。

この汽船は兵各弾薬を南方へ輸送するものと住民は相激して
た。

今九月七日沖波意兵隊某軍曹が突然、米島した。用件は
渡船数の減船を軍需部へ渡務班に徴用の目的であった。

艦渡船、嘉量丸、源三丸、神祐丸、信勝丸の四隻は乗組員一
三〇名と共に九月八日午四時を期して所波運港へ集結を命
ぜられ同日午十時那霸港へ出港した。

旬日言ふ下すく村官航路嘉量丸も軍需運搬の目的で徴
用され、那覇朝久米島間の輸送任務に付いた。軍は板倉保持の
ための移動性のあり船舶の喪失は同各港の出入を堅く禁じていた。

今九月九日午前八時南へ行くと思われ汽船から渡嘉志久
に小型舟艇が近すて来た。敵艦の二隻は武装した陸軍の

兵隊が上陸してきたからである。或る兵に尋ねたので渡嘉志久
に駐屯するところである。部隊は鈴木部隊で兵員一十名。

基地隊と呼ばれた。

鈴木部隊は渡嘉志久に上陸を完了し渡嘉志久部隊へ入道
した。村国防婦人会は部隊歓迎のため総動員で湯茶の
接待をし軍の慰労に努めた。兵員の中には長途の輸送で疲

勞した為か下痢患者を統出する有様であった。

部隊の宿舎には住民の住居があるがわが村民は部隊長、鈴
木少佐の要請により男子十六人、女子十六人

から十六人までが部隊に協力九月十日から陣地構築作業に
従事した。

今九月二十日特幹船舶隊と稱する部隊が赤松大尉を隊
長とし兵員一三〇名と舟艇百隻をもちつて米島渡嘉志久に

阿波連の艦七日夜猛烈に攻撃演習が秘密裡に行われ

数日後微用された渡船は濃業の根據地を渡り敷港を更
更なる為全渡船帰港連日懸渡業と從事軍需獲得に
從事した。今十月十日即朝上空は爆音と共に平素と異なる
た様子が見られた。時々は高射砲の彈雲も見受けられる
下鈴木部隊本部に向ひ合むすと反軍の村を射撃演習を
その間に村民は安心して何時も通り陣地作業へついた。
渡船班も是も嘉島丸は生渡し源三丸神祐丸は港内に
敷留しおいた。その頃前島赤子の上空には数百の飛行機が
丸舞してお尻が向もなく八十米の上空に四機編隊の銀翼が
大規模な爆音と不音を抱きながら眺めていると飛行機は枝
首を下りて底空すまると同時にカマノノと枝銃掃射を始りた。

はじめに敵機の空襲を知り村民は上下への大混乱に陥つた
大人は陣地作業のため留守であり老人は幼児をかえ敵
機の子童の手を引き右往左往待避に長時間を要し敵
機の空襲は益々猛烈に各種の枝銃掃射と共に小型爆弾が投下
され何回もなく波状空襲が繰り返された。

嘉島丸は東海岸を餌料採捕中爆沈され村岡長吉波蔵
欽彦氏は戦死し、他の乗組員はかろうじて生命を得た。
源三丸神祐丸は港内に於りて火災に遭没し軍用船(之は丸
も港内待避)中爆破され戦死者二名を数した。村邊航路
嘉道丸は軍需物資輸送久米島からの帰途渡石長島沖
合で空襲を受け甚沈され村岡長吉波蔵連平事務長小領
加賀明の命を奪つた。船長古波蔵良秀は三日漂流の後
渡石長島へ上陸し生還した。

全漁船を失ひ乗組員は翌日から陣地構築作業に従事する
と同時に各高地に設けられた軍監視哨勤務につき日夜軍に
協力した。

状況は日毎悪化し島の東海岸には暗夜に飛び接近した
敵潜水艦の姿が度々見受けられた。

令十月下旬

今まで自家通動下軍陣地作業に従っていた村民に防衛
隊より七十九名の召集が下令された。兵舎には村の国民学校
校舎を充てゝ初年兵勤務が続けられたが教練は全く疎
抜作業に従事し昭和二十一年元日を兵舎で迎えた。

ヤムと島陥落後状況は益々悪化し沖波部隊へ入隊する
現役兵を送り去り下り困難を極めた。予備も平光して軍に
協力の。婦人会、青年団員も軍の炊事班に徴用された。その

頃軍の防衛陣地及壕が大分完成し舟艇の待避壕も完
成、海辺に至る枕木も敷設を終え舟艇百隻は枕木のよみ来
せぬ去来の準備は全く完了した。

昭和二十二年二月下旬渡島敷島の陣地構築は殆んど完成
したが基地である鈴木部隊は整備中隊と通信隊の一部
及赤松隊特幹隊を残し沖波本土防衛の島尻地区へ移
駐した。それと前後し水上勤務中隊と稱する朝鮮人軍
兵三百二十名が楠原中尉を隊長として来島しその任務に
ついた。鈴木部隊移駐後は村出身の防衛隊員は赤松
隊長の指揮下に属した。

令三月二十三日午六時空襲警報が発令された。軍艦は
悪化し朝八時がウラマニ村の波状空襲が向断なく繰返された
B二十九と云われる大型機の編隊も再三飛来し爆音は山谷

トニドヤシ耳をツんとく連してある。午前八時半村役所郵便
局の犠牲となり続いて防衛隊の兵舎である国民学校の爆
破炎とこの部も大半焼失した。伊野波診療所長外
十名は村役所附近の壕で待避中重傷五員、うた。
空襲は一時止んだ。住民は事前には構築してある谷内り
待避所へと避難を急いだ。平素の防空訓練も実戦に
は全く敵目であった。明け二四日、二十五日空襲は続
き美しき山河は火の海と化し、夜空を真赤と染めた。未年
住みながら故里も今は戦場と化したかと思えば涙するおなじ
程であった。

今三月二十五日未明赤軍は艦砲の援護射撃の下に阿嘉
島に上陸を開始した。間もなく慶良間海峡に潜水艦を伴った
艦隊が侵入し、何と日本軍を見くびらかり如く悠々と投擲し

千三〇

渡嘉敷陣地を砲撃し山谷や部落はまたく間もなく日
面影を止める焼土と化した。午後十一時赤軍隊長は特
幹隊員に出発準備の命令を發した。

夜空に敵艦砲の落下ももろかやと防衛隊七十余名、男十青
年団員一〇名壯年団員三〇名、婦人会四〇名が軍に協力
舟艇百隻は待避壕より列をなして出た。二十六日午前四時渡
嘉敷久、防波堤の海辺に勇姿を拵えた。気の早い元氣旺
盛な特幹隊員は勇躍乗船しエミデの音も高々と敵艦
裏沈心に躍らせてお島の命令を今、ノノと待っていた。

防衛隊員新砲信平と年兵以下八名は枝角銃をかかえ
援護射撃の陣地へついた。東の空は白かつ、あり出雲の
枝を失った、ありながら赤軍隊長は出雲命令を下す。壕
の奥に待避し戦意を全く失っていた。

百隻、舟艇は去妻の勇姿を拵れたるに便明けたり敵が
ン様、偵察に会つた。隊長赤松大尉は何も考えずか或は氣
が狂つたのか。全舟艇破壊を命令した。特幹隊員は呆然として
いたが、上言の命令に抗するも出来ず既に去妻の柁は失
したため、隊員は涙を谷へ下舟艇の破壊を美施した。
舟艇を失つた特幹隊員は本来の任務を全く捨てかねて調
査済の西山の奥深く待避し赤松隊の生玉伸び作戦が始
つた。陸士士の大尉赤松は完全に舟艇者の汚名を着せら
れた。

船舶团长三之少佐は座間味島を抜け出し赤松大尉と
行動を共にした。

今三月二十六日敵は海を援護射撃の下に渡部志久阿波
連より上陸を開始した。赤松隊は応戦の意志は勿論

武器、彈薬を放棄し隊長以下全將兵の生玉逃げ作戦
が西山陣地に於て始つた敵は完全この島を無血占領した
今三月二十七日ノ刻艦艇は(並)並々里を順を通じ住民は一人
残らず西山の軍陣地北方の合血地に集合せよとの赤松隊長の
命令が伝達された。その夜は物凄しい豪雨であつた。赤松の
上陸は住民の生玉多かるべき全な場所を米わしめ、ひたすら頼
るは赤松隊のみである。ハブの棒も真暗な山道を猛雨と戦ひ
つゝ子を拵つ親は背に嬰児を背負ひ、三つ児の手を引き、合羽の
代りトカヤ延を西復ひ老人の足を助けながら砲彈中を航
別もなき西山へたどりついた。
雨の谷間は親子兄弟を見失ふ人々の叫聲がこぼれまゝ、全く
生地獄の感である。西山の軍陣地へたどりついた住民は兵事
主任新城真慎をして集結場所を連絡せしめた。

赤松隊長は意外にも住民は軍地陣外へ撤退せよと命
令である。

今三月二十一日午前十時住民は涙を吞んで軍の指示に従
い軍陣地北方の盆地へ集つた。その頃島を占領した米軍
は反軍陣地北方百米の高地に陣地を構え完全に包圍体
型を敷いた。赤松砲を以て赤松陣地を迫り遂に住民の待避
する盆地も砲轟を受けろと至つた。赤松は刻々に迫つた。事
に至つては何とも難く全住民は皇門の萬才と日本へ心勝
ち祈り笑つて死のうと悲壯な決意を固めた。かねて防衛
隊員に所持せしめられた手榴弾各二個が唯一の頼りとなつた。
各々親族が「かたまりになり一発の手榴弾に二三十名を集めた
手榴弾がそこそこで発火したかと思つたと雖も然る無気味な
音は谷間を埋め瞬時として老幼男女の肉は四散し所修羅

の如き所昇昇叫喚の地獄が展開された。死にぞこたつたもつは
棍棒で頭を打ち合ひ、剃刀で自らの頸部を切り、鎌で親しい
者の頭をたゞさ割る等せむもあせう、情景が繰りかへられ
谷川の清水は血の流れと化した。一瞬として三十九人の生命を奪
つた。その憎みの盆地を住民は今なお玉砕場と呼んでいる。
手榴弾が発で死をまねかした者は軍陣地へと押しよせ、
赤松隊長は壕の入口に立ちはいよいよ軍の壕へ入つてはいけな
い。遂に軍陣地を去れと厳しく構え住民を脱けさせた。
住民はすこゝと軍陣地東方の盆地に集り一夜を明した。
今三月九日米軍の迫撃砲は執拗にも集民待避し盆地へ飛
来し住民三十二名の命を奪ひ去り防衛隊教員の戦死者を
おした。

今三月一日米軍は赤松隊の兵力を見くびつたかたに半島を徹

退した。空襲も止み生々延びた住民は張りつめた気力も失
い五月間の空腹に悪逆の病者、如くさまふい歩も足りも少
くとも浮いていた。一死場所を失った住民は迷い歩いた掃向僅
かな食糧を残して置いたも、避難地思川河原へ集った。
赤松隊も持久能執力入り食糧確保に奔走した。
間もなく赤松隊長からの命令が伝達された。我々軍隊は島に
残つて居ゆる食糧を確保し持久能執力自衛人と陸軍と
戦を交えねばならぬ。事態はこゝ島に任むすべし。人間は死
を要求せらるゝと主張し住民に家畜屠殺禁止の隊長命令
がふらふら違反者は銃殺という厳しい不達である。直ちに住民
監視の赤崎隊が設けらるゝヨリ少尉はそり任に付した。
住民の座間味盛和にスパイの嫌疑をかけ、無実の四罪におとし
入れ斬り殺したのもヨリ少尉である。

赤松隊の全部を失つてしまふとさまふい歩も古波蔵隊を之
敵に通すも恐れありと高橋伍長の軍刀にかけさ等住民に
対する残虐行為がはじまった。
海峡には敵飛行艇百五十隻が常駐、駆逐艦十数隻又
小型空母等が周辺に停泊していた。その他艦船を含む船舶
の数は三〇隻を下つたことはない。
時々友軍特攻隊の攻撃もあつたが敵対空砲火には抗し難く
火を吐き海中に落下する尊い決りも見つた。
今四月下旬頃から軍民共に飢餓のひんし、鉄の切干と野
草を混じりて食用食下路命令をつたいた。
元氣の者は監視の眼を逃れ、島々各所から鉄を集めた。
生き残った防衛隊員は軍の命令により防衛隊長屋比久孟祥
の指揮で軍の食糧獲得に努めた。

今五月初旬、軍は遂に住民の保戸を以て、僅かに非常食糧
の供出を強要し、朝鮮人軍史を以て食糧を徴集せしめた。
住民は急激に老幼男女の果ては養食調が荒れ出し、生息は
無甲斐を感じする者もあつた。食力ある者は、夜間海岸に
出で、米艦船から捨つてくれた肉切れや果物の漂流物を採り
取り、食糧の足らした。座間味島を避けて、赤松大尉は行
動を失した。三宅少佐は危険が多い、この島を脱出、沖磯本
島へ抜け出すことを考へ、絶えず機会をわうつて、防衛
隊員の中より、刺舟を終戦のある者の調査が行われた。こ
の時、白羽の矢が防衛隊員小嶺賀平、玉城定夫の両名に
当たつた。本人達は希望する所ではなかつたが、軍命であらば致
し方なく決死行の意を固めた。

刺舟は三宅少佐、外三名の軍人を乗せ、清平の赤満漢天

二名と共に渡和敷港を出発した。

静かな海峡を敵艦艇の監視網をくぐり、四哩の海路を見
事、赤島部へ逃入した。

赤島北方海岸に刺舟をかくし、上陸して見ると住民の姿は見
受けられない。その夜、沖磯本島への砲撃は寸時も止まぬ。
明陣の合同に砲撃は十六哩の海をこえて耳をへんぶく有様で
ある。

夜は明け、書信の沖磯本島を望めば、無事目的を達すること
到底望めない。然し少佐は萬難を排して決行せよ、この下あ
る。宵暗と共に前島を去るが掃海艇の敵言を厳しく
二回三回と失敗を繰り返し、命からむ引返した。鈴木少佐は
舟長小嶺賀平を呼び出し、言葉も厳しくなつた。小嶺は
慎重な期をば、目的達成はあきらめ、と答へると少佐は激昂

し軍刀を握りて眠んでいふ。切らなう切れと前に鎌倉を先征は
何を考へてか平靜に返つた。今こゝで切つては勿論目的達成
が去来ないことを知つたのであろう。漕ぎ手は疲れ切つて精一杯
だった。遂に最後の決死行の志を決し再び前島を後にした。
輻輳する艦船の横腹をす掠りつゝスラミーの波に港にまれ
なかり遂に神山島北へ出た。暗夜に乗りこむ那覇へ向けられ
海最しく傍岸不能である。合議の上船首を米満港へ
向けた。東天は既に夜明けを知らせつゝあり島分は力漕し
米満港は目前に自つた。夜明けにあせりながら死に力漕し
遂に米満港についた。一人の負傷者もない全負無事と喜
び乍ら疲れも忘れて真玉橋の部隊本部へと急いだ。
今五月初旬米軍は再び渡嘉敷を占領した。赤松隊へ備
へて各高地に砲陣地が構築された。間もなく伊江島住民が渡嘉

敷部部落へ移され、米軍の保護下で收容された。赤松隊は極
度に食糧欠乏し、若い下士官や將校は夜間切りかゝり構して
米軍食糧集積所を襲い食糧・煙草等を確保する様になつた。
そのために米軍は各要所に地雷を施設した。鈴木、小松原両少尉は
その犠牲となつた。
伊江島住民は米軍の保護を受け、渡嘉敷部部落の焼け残つた家
屋で生活してゐた。
米軍の要求により伊江島住民から選ばれた若き青年男女六名が
赤松隊へ派遣された。それは戦争が既に日本の不利であり降伏す
ることが最も賢明な策であることと伝えらるゝであつたが赤松隊長は頑
固として聞かぬ六名の者を斬殺した。赤松隊自決に重傷を負
ひ米軍に收容された十六名の少年小嶺武則、金城幸次郎の両名は

米軍の追撃を受け、とうとう恢復したる米軍の指不に従い、渡嘉敷住
民への連絡のたの避難地へ送り入れた。目的は住民へ早く下山する様仕
えられたのであつたが途中赤松隊の将士は二人を捕へ(米軍に捕へる理由
の不明)に処刑した。

渡嘉敷小学校訓導大城徳子氏は敵に捕へられおそれありと
斬首された。かゝる住民は日々欠乏する食糧と赤松隊の恐喝に益
々々おぼろみであつた。食うに糧なく下山の方途なく栄養失調
は能くする有様である。

飢餓と戦つて六月七日の夜を過し八月を仰ぐと食糧は欠乏の
極に達し住民は死の寸前たるやうな状態に陥つた。

今八月十日、干赤自決場を毒を失ひ幼鬼二人を抱へた郵便局長
徳平秀雄氏は長女を背負ひ長男の手を引きて住民十五名と共に食
糧を山谷を移動中、米軍の潜伏斥候四十数名に包圍され、

拉致された。これが住民下山の第一号となつた。

今八月十五日米軍機から赤松隊陣地へビラが撒かれた。ポツラの直
まの要旨は述べられ、降伏は矢つぎ刀折れる者とするへま買明
な途程と観勧告してあつた。住民は集団投降の意思を固め代表
を選んで村長古波一藏惟好氏と相談した。村長も民意の趣むく
所止むなくこれを許し住民は八月十五日迄に殆んど下山した。

今八月十六日防衛隊員と残つた一部住民が下山したが赤松隊は依然と
して投降せず米軍の指示により渡嘉敷住民の中から軍使としておこな
ひになり、新垣重吉、古波藏利惟、上野領徳、大城牛の四名が選ばれた。
軍使としての任務勿論赤松隊への投降勧告であるが一旦見付かれば死
を覚悟せねばならぬ。新垣、古波藏は軍隊生活の経験あるものの勧告
文を木の板に縛り付け密に任を果した。上野、大城の両名は要
領得おして赤松隊に捕えられ即座に切り捨てられた。

合八月廿一日赤松隊知念副官が軍使として米軍に投降の交渉に當つた。合八月十九日赤松隊長、知念副官、外將校一名が米軍本部へ到着。渡部敷小學校校庭に於て武装を解除せしめ降伏文に調印した。次いで西村大尉の率いた赤松隊將兵は戦死した戦友の遺骨を光頭にて二十日渡部敷校々庭に集合し武装を解除せしめ同ちかく沖繩本島へも出発した。

總べての力を籠集しあらゆる食糧を確保し持久態勢を整え米軍と一戦を交へ、皇國の爲に全員玉碎。渡部敷島に屍を曝すと豪語した赤松隊の米軍の飲量には抗すべくもなく数日の如く連れ去られたかと思ふと一擲の決を催すものがある。

斯くて本島作戦と切り高まっていた島の戦線は砲撃の様相と経路を辿りつ、沖繩本島の降伏に導かれ二十一月昭和二十年八月二十二日その幕を閉じた。

最後に特筆すべきは三月二十七日渡部志久道路上で米軍と遭ひし。激戦の後、伊勢山山頂を護国子化と散った佐藤小隊の一事である。

元龜信從業負沖繩戰記
又米島郵便局之部

天長の賀賀郎に艦砲射撃事

昭和十九年此の頃は日本の南方作戦も既に敗戦を続けて来た
ども拘り国民の神馮的精神状態と希望の観測は何となく
此の事美とシつくりしなむのがあつた。然し冷徹な事美は我々が希望
する否と拘り我々の身辺に迫つて来た。四月二十九日午
後之時三十分又米島東北海上の用える砲臺の音、時を移す所防艦
視哨から仲里村真泊方面艦砲射撃を度とすの情報即時これを防
空通信として打電した。

当日は天長の賀賀郎、日本国中津々浦々に至るまで国民挙つての慶を祝
の日である。皮肉にもわがノ、この日を遂んで日本々土と米潜水艦が砲
裏を行つたのは何と、う嫌うせむとこの當時は思つた。
艦砲射撃は午後之時三十分から今三十九分迄九分間行われた。
被害死者一、負傷者一、建物の被害若干であつたが一般民心の動

播は深刻なものになった。その翌日四月三十日、久米島西南海上三十哩沖合に於て日本油槽船「金救助頼重」旨の通信筒が飛行機に墜落した。十月十日空襲とその後の対策

昭和十九年十月十日午前十時五十二分、久米島に米機四機飛来し仲里村字銭田及び具志川村字仲泊島島方面を機銃掃射しなち久米島附近航行の軍用船数隻が喪失され、約五百名位の軍港務者中又一名久米島に泳ぎ着いて生存した事実がある。以上の様な状態は慶長年間以後武器を放棄して戦争といふものが自己の周辺で行われ、争いなき沖渡人など何となく危険が身近に迫っている感じを濃厚にした。数年未拵者はかりに用を固めた空襲必至の警鐘はなまなく、現実となつて、島民の耳を打った。次は上陸必至。之に對して局務を如何に措置すべきか、松は當時の局長会長岡吉

直野瀧局長に對して「事態最悪の場合の局務措置方針につき沖繩全体として豫め通信局長より指示を受けたいか」との意見を電報を以て進言すると共に自局喜久里主査、石城、大田内通信手の幹部を集めて今後の局務運行並に非常措置を考究した。その結果

一、現局舎は無疎塔があり、攻撃の第一目標となる事は必定だから、比較的安否な家を借りて分室を設け電信電話以外の移動可能な事務は分室に移し出、未だ限り被害を避けて事務の継続と関係書類の確保を図る。その中でも特に金銭関係証據書諸帳簿を第一とする。

二、郵便運送は契約の相手方久米島航路組合の所有船は二隻共十月十日の空襲で那覇港に於て、喪失されたので郵便運送は契約外船舶の好意による外なく責任上甚だ頼りないものである。之を